

随 想



夏の朝／小川英紀

絵を描く愉しみ

小川 英紀

（画家）



高校の時に絵を描き始めて三十年、学生時代のある時期には、絵筆一本で身を立てることを志したこともあったのですが、卒業後はとてもそんな自信がなく、教師をしながら絵を描いています。途中で大きな壁にぶつかり、絵を断念しようかと思案したことも何度かありました。それでもなかなか絵筆を捨てきれません。現在でもその壁を乗り越

えたとは言い難いのですが、日頃の努力の積み重ねがあれば、いつかは花開く時があると思じて描き続けています。

誰でもそうだと思うのですが、真白の紙やキャンパスに向かっていると、それまでの作品よりは少しましなものが描けそうな気がします。大概はみじめな結果に終わってしまう訳ですが、また新しい作品に取りかかろうとすると胸がときめいてくるから不思議です。

今世紀の初め、ダダイズムの画家たちが、展覧会を開いた時、何も描いていない真白なキャンパスを「幸福」と題して展示した画家がいたそう

です。私にはこの画家の気持がよくわかります。

さて、今回の個展（5/1～5/6 ギャラリーほりかわ）の作品は、勤務先の神戸女学院のキャンパス内を題材にして二十数点の水彩画にまとめたものです。普通、学校というのは絵のモチーフになりにくい。

それも一、二枚ならともかく、何十枚もの構図を探すとなるとなおさらです。けれども、岡田山の緑につつまれた神戸女学院の建物には、いわゆる学校というイメージとはほど遠い趣きがあります。その中心になるのが、昭和の初めにヴォーリズの設計によって建てられたスペイン風の格調の高い建築で、周囲には四季折々の花を咲かせてくれる樹木や草花が植えられています。ヴォーリズは、建物自体の持つ教育的影響を十分に考慮して設計したと伝えられています。まさにその通りだと思います。

海岸通りや栄町通りにある大正、昭和の初期に建てられたビルなどもそうですが、古き良き時代の建築物には、ゆ

とりと言うか、何か私達の心に落ち着きとやすらぎを与えてくれるものがあります。神戸に生まれ育った私には、このような洋風建築を描くのが自分のフィーリングに一番合っているように感じます。キャンパス内を、授業のない時や放課後、あるいは休日に、スケッチブックを片手に、描きたい構図を探している時が今の私にとって最も充実した時間です。

迷路の猫

福田 知子

△詩人▽



夢に見た胡蝶が現実か、それとも現実の私が夢なのか——季節の移りめになると、私は莊子の胡蝶のようにひらりひらり夢ともうつともつかぬ状態に陥る頻度が多くなる。

六月は太陽の高度からいうと、一年で最も明るい季節であり、本来なら眩しすぎる光をやわらげてくれているのは

梅雨の水分である。

私が須磨に引越して来たのは、おとしの雨の日であった。萩原朝太郎は、道を歩きながら冥想に耽る癖があり、自分の家のすぐ近所で迷い子になり、人に道を尋ねてよく笑われたらしい。そんな極端な例をひくまでもなく、今来た道がわからなくなることは日常しばしばある。駅前から3軒目のおそば屋さんを曲がって、郵便ポストを左に折れ、喫茶店に突きあたる。テニスコートを半周して右の路地を10メートルほど歩き……と覚えていても、いつときでも途中でほんやりと冥想に耽ってしまうとわからなくなり、それではと元きた道を逆に辿ろうとしても上手くいかず、たちまちそこは迷路になる。私が越してきた潮見台あたりも、ちょうどそんな迷路になっていた。

迷路は循環している。ギリシャ神話にみられる「ミノタウロスの迷路」のように、内へ内へと巻いてゆくかたつむり状である。ここでは、迷い込むほどに無限小に近づいて

ゆく。その無限小の地獄から私を救ってくれたのは、アリアドネの糸ならず数匹の猫たちであった。私の家から駅までの迷路には、要所要所に、するように猫たちがいて、それぞれがみな違う姿カタチをしている。飼猫にしる野良猫にしる、猫たちにはテリトリーがあるらしく、この往来からあその電柱までといった風に律儀に私を見送ってくれるのである。だからだといってくることはしない。そして、道を行きあぐねると次のテリトリーの猫が出迎えてくれるので迷うことはない。

この話を友人たちによると誰も相手にしてくれないが本当の話である。それではと、誰かと連れ立って歩くと猫たちは警戒しているのか姿を見せない。△北に向かっていくつもりが実は南に向かっていった△とはいわゆる「狐に化かされた」ことであるが、科学的にいうと三半規管に変調をきたしたことになる。というのも、方角を知覚する機能は、耳の中にある三半規管の作用らしいから。

この世に猫がいる限り、私の三半規管はなまけていても大丈夫なのである。今はうれしい季節の移りめ。今朝も冥想に耽りながら猫たちと散歩して来た。

北イタリアの

ベルガモ

安田 義男

△ベルゲンオーナーヴ

今から20年前、イタリアが本場に遠い国であった頃、イタリア料理の修業で向こうに渡り最初に行った町が北イタリアのベルガモでした。

最初は料理用語を覚える必要もあり、オステリアと呼ばれる家族的な小さなレストラン。その主人の世話で料理コンクールに出場、新聞等で

紹介され、これが縁で「タベルナ・デル・コレオニ」という有名なレストランで働くことになりました。

一年間程ベルガモにいた後、チーフの紹介でイタリア各地のレストランを約3カ月ずつ転々と料理修業。ジェノバ、ベネツィア、フィレンツェ、バルマ、ピアチェンツェ、ボローニャ、北に上がりパウエル、トリノ、最後にミラノへ。

イタリアという国は統一された国家になって百年そこそこの歴史。ですから、今だに地方によっての味の特徴が強く残っています。極端に言えば北と南では全く味が違い、南はオリーブ油、北はバターやサラダ油。また、南は乾燥めんのスパゲティやマカロニ。中部イタリアに入ると手打ちパスタ。北部はリゾットに代表されるように米の料理が多くなります。

イタリアには3年半滞在していました。言葉には苦労しました。各地で言葉が変わりますから。私が最初に行ったのがベルガモでしたから私のイタリア語は、今だにベル

ガモ弁です。

一九八四年の秋、ベルガモ市長より、ベルガモを愛し、ベルガモの名を日本に紹介したということから、名誉市民に。同じ時期にイタリア料理組合理事長で、ミラノで有名なレストランをしているアルフィオさんから「良いレストランとして評価する」という意味の賞をいただき、翌年にはベルガモの王様より名誉市民賞をいただきました。

イタリアから神戸に帰って14年、いつの間にか今の北野の店を出してからもう11年が過ぎました。

ベルガモの名誉市民としての誇りを忘れずベルガモの街を大切にし、イタリア料理の素晴らしい伝統ある本格的な味づくりに努め、イタリア料理そのものを神戸の皆さまに味わっていただくことと決心しています。私は、毎年一カ月程イタリアに行き、味の探究にとレストランを食べ歩いていますが、神戸っ子の6月号が出る頃、私は再びイタリアに渡っていることでしょう。アローラ・チ・ベ・リ・アーモ。



ベルガモの王様より名誉市民賞を受けた安田さん



久し振りに映画を見た。「愛と哀しみの果て」。

忙しい日が続いて疲れているので、何かしみじみしたもの欲しかったのだ。ごく軽い気持ちで映画館に入ったのだが――

何と素晴らしい。広大なアフリカの自然、美しい緑、数々の動物達。いや、そんなものより主人公にうっとりしてしまった。

メルル・ストリープ演ずるカレンは、堂々としていた。強かったし、よく働くし、頭もいい。そして美しかった。

男に従属してないのがよかった。はっきりした意見を持っているのが立派だった。しかし、私が一番感心したのは男の愛し方だ。

夫に裏切られたカレンは、ロバート・レッドフォード演ずる恋人デニスと同棲する。彼は仕事で出掛けるが必ず彼女の所に戻ってくる保証はない。留守の間の不安が大きければ大きい程、再会の喜びも烈しい。

二人の愛の生活は美しい自然の中で、これ以上のぜいたくはないとも思える程の甘美さだ。その

□ エッセイ

髪を洗って
もらいたい

田中千佳（作家）

カット／松本宏

中で、私が好きなシーンは、彼が彼女の髪を洗ってあげるところだ。

戸外で、彼女の髪を白い泡で一杯にして、それから椅子に坐った彼女を仰向けのまま、少し倒して、静かに水をかけていく。逆光の中で髪がキラキラと金色に光っていた。

彼女は楽しそうに、心地よさそうに笑い、すっかり彼に任せて安らかな顔をしていた。彼の方も、嬉しそうだった。

私は画面の中の彼女になったような気がして、椅子を少しずらして坐り、頭を後ろにもたげていた。彼の指が私の頭のかゆい所に届き、優しく揉んでくれてるようだった。やがて、ぬるいお湯ですすいでくれて、タオルで拭き、

「いい気持ち？」

とデニスが聞いてくれないかしらと思ったりした。その晩、私があんまりこの映画の話ばかりするものだから、姑も翌日見に行った。それからが大変だった。何しろ女二人が、「素敵」だの「感激した」だの、興奮してまくし立てるので、夫は

あきれて一人でテレビを見ていた。

女二人の意見としては一番よかったのは、やっぱりあの髪を洗ってもらうシーンだということになった。姑は、

「素晴らしいでございますわ。男の方に、あんなに優しく洗って頂くんなんて」

とうとうりしている。私も、

「日本では病気の奥さんの髪を洗う方はいますけど、元気な時に、愛してる人の髪を洗って上げようという男性はなかなかいないでしょうね」
と合槌を打った。

ふと見ると、夫は知らん顔してテレビを見ています。私は、

「ねえ、ちょっと、ちょっと」
と夫をゆさぶり、

「あなた、お天気のいい日にお庭に椅子を出して、私の髪を優しく洗って上げようと思わない？」

と聞いてみた。夫は、びっくりしたような表情で私を見たが、

「いや、思わん。俺の頭の中からは、庭に椅子を出して女房の髪を洗うなんて発想は湧いてこん。絶対にしようとは思わんね」
と断言した。

「おばあちゃま、あなたの息子は駄目ですねえ。全然思わないんですって。本当に唐変木なんだから」

「日本の男は駄目でございますよ。相手の女性の人格を認めて、対等に扱って、その上、優しくするなんて芸当はとても出来ませんわ」

姑は約六十年連れ添った彼女の夫に、昨年先立たれたのだが、長い間、絶対服従だった。自分の

意志を持たず、従順な妻というのが、彼女の夫の好みだったから、姑は、それに合わせてきた。

「私は洋画が好きでございましたが、お父様がお嫌いでしたから、何十年も見ることがございませんでした。久し振りに拝見して本当に嬉しうございました」

姑はこの頃、思うことをはっきり言うようになった。行きたい所へ行き、したいことをするようになった。六十年間も、ずっと辛抱して、八十歳に近い今、やっと自由を得たのだ。未亡人になって美しくなり、生き生きしているように思う。

舅は手活けの花のように妻を大切にし、かわいがった。世話をやき、保護したつもりかも知れない。姑も夫が好きだったからこそ、長い間、彼の言うなりになってきたのだろう。

しかし、彼女の

「日本の男は駄目でございますよ」

という言葉には凛とした響きがあって、万感こめられているように感じられた。

女は愛されるのを待っている。でも、男の自分勝手な愛し方ならいらない。こちらが喜ぶように愛してほしい。夫の返事に不満な私に、姑は痛烈な結論を与えてくれた。

「髪を洗ってもらいたいなんて期待するのはお止めなさいませ。どうせ不細工な洗い方で、がっかりするだけでございますよ」



〈筆者紹介〉

本名 林 陽子 昭和5年、朝鮮京城生まれ。戦後引き揚げて京都に住む。旧制同志社女専英文科卒。アメリカ糸商社に就職。結婚、その後出産のため退社以来、専業主婦。「マイ・ブルー・ヘブン」で昭和六十年、中央公論女流文学新人賞を受賞。現在、東灘区在住。

●こうべ味な旅②②

豚まん

ドイツ菓子

森須滋郎／四季の味編集長

カット／石阪春生

KOBE——っていわれると、私の思い出は戦前の四年間に集中します。

当時、旧制姫路高等学校に在学中で、神戸から来ているクラスメートが多く、毎週のように土曜日から日曜日にかけて神戸へ遊びに行ったものです。なにしろ、帰省する友だちの家へ泊れるんですから、宿泊代はタダ。交通費もキセルする場合が多かったのです。そんなときは姫路駅と神戸駅で入場券を買うだけで済みました。

神戸へ遊びに行ったといっても、いつもオケラ同然の高校生のこと、大したことなんかできるはずもありません。元町から三宮を何度も行ったり来たりして、空腹になると元町の細い路地を入ったところで名物の豚まんを食べるとか、友だちのフトコロが潤沢なら大井肉店ですき焼をおごってもらうとか、そんなところでした。

いまでも憶えているのは、ドイツ人の老夫婦が三宮の居留地に店を構えていたユーハイム。木造の異人館といった建物で、玄関のところにドイツ菓子を陳べたケースがあり、その奥がティールームになっていました。そこでお茶を飲みながら過ごしたひととき、まるでドイツへ留学したかのよ

うな気分浸れたものです。

甘いものといえば、そのころ、元町のヒロタでは、客の目の前で小さなシュウにカスタードクリームを詰めていました。クリームの入ったポンプの先が尖っていて、それをシュウに突き刺してポンプを押すと、たちまちクリームが詰まるという仕掛けです。面白そうなので、店員にせがんでやらせてもらったところ、ポンプを押し過ぎたせいか、シュウからクリームが溢れました。ホントのところ、クリームがなめたくて、わざとやったのです。あの頃は、そんなことが許される、古き良き時代だったわけです。

いまもある元町の時雨茶屋は、戦前から続いている店でしょうか。その姉妹店ということで、姫路に春雨茶屋がありました。

店のなかには葦簾（よしず）で仕切った小座敷が四つほど、それに離れの二室といった小体ながらも気のきいた料理屋でした。もちろん、高校生が気易く入れる店ではありません。しかし、当時から食に関しては一流志向を持っていた私は、図々しくも月に一度は通いました。

やがて店の人たちとも親しくなったのは当然として、なかでも私を息子のように可愛がってくれたのが店を委されていた年増の仲居さん。私がオケラだと知れば、わざと命令口調で、

「ボンやん（私のニックネーム）、いそがしいよって手伝うてちょうだい」

と、いいながら帳場へ押しこめて、帰りに小遣をポケットにしるのばせてくれるのが常でした。

なにしろ、お天道さまとコメの飯には困ることのなかった時代、親からの送金は三日か四日間

パー、あとは何とかなったのです。

たとえば、町を歩いていて急にコーヒーでも飲みたくなると、西魚町という花街の辻に立ってお座敷帰りの芸者さんと呼びとめて、

「通行税、五十銭でも一円でも払うて行きや」すると、彼女たちも馴れっこ。

「ボンやん、またかいな。一緒に行こか」

と、いった具合で、いまして思えばユメのような話です。もっとも、月に一度の送金があったときは、ちゃんとお座敷で借りを返したこと、いうまでもありませんが……。

そうそう、こんなこともありました。

姫路高校の入学試験を受けた帰り、打ち揚げだなどと勝手な理屈をつけて有馬温泉へ骨休めに行きました。ひと風呂浴びたあと、生意気にも芸者を呼んで清遊したものです。

さて、どうまちがったのか、その姫路高校に合格できて寮へ入ったところ、有馬温泉で新入生の歓迎会が開かれることになりました。

広間での歓迎会が終ると、上級生の有志が希望者を芸者遊びに連れて行くというのです。面白い

ことになったと思いがちでも、とある一軒の料理屋へしけこんだあと、この前の芸者も呼んでくれるよう、仲居さんに耳打ちしました。

そろそろ座が盛り上がりかけたところへ現われたのが先日のお彼女。挨拶して一同を見渡しているうちに私と目が合った、そのとたん、

「やァー、あんたやないの！」

それまで先輩風を吹かしていた上級生たち、しばし口をアングリ開いたままでした。

そんな思い出のある有馬温泉も、いまでは神戸市北区に編入されていると聞き、うたた隔世の感があります。

隔世といえば、あれから約四十年。

うまいものを取材するために、またもや何度か神戸を訪れるようになりました。といって、ホントにうまいものが食べたいと思えば、これといった店を見つけて通いつめるべきだというのが私の持論なのです。当然、この欄でご披露できるよう情報は持ち合わせていません。

ただし、できることなら馴染みを重ねたいと願う店は、何軒もあります。

日本料理では、山本通りの馴走、元町のテンブラ屋藤原、穴子ずしの青辰。洋風料理では北野町のジャンムーラン、ステーキの蠟皮、芦屋の千暮里、甘いものでは、モリモト（籠池）のチョコレート。お茶を飲むなら、にしむら珈琲店のうちでも北野店。せいぜい、こんなところですよ。

もし、どなたでも取っておきの情報があればありましたら、むしろ私のほうが教えていただきたいと思っています。ヘンな「こうべ味の旅」になりましたが、ご諒承ください。



一人だけエキセントリック

森下悦伸

（ラジオ関西報道制作部）

その時ボクは神父さん達とダブルスをしていた。あのいまわしい突起物がボクの耳を貫通したのはロブを勢いよく追いかけて、壁に激突した時だった。一瞬何が起こったのか自分でも分からなかったが反射的に押さえた右手が真っ赤だった。

驚いたパートナーのオオモリさんが、「すぐ病院へ行った方がエエ」そう言いながら真っ白いコ罗纳でボクを芦屋市民病院に運んでくれた。支配人のカドワキさんが電話してくれたのか、ヨシムラ先生が待っていてくれた。耳鼻科の先生のくせに口ヒゲがまるでコピーライターのようにだった。ひと目みるなり「ウーン、これは耳にしては大ケガだな」といつつも、久しぶりの手術が嬉しくて仕方がないようでもあった。それでもボクはその口ヒゲに安心したのか「明日もテニスしていいですか?」「ああ、いいですよ。コーチかなんかしてるの?」「いいえ、会社員です」なんてヘラヘラと世間話をしていうちに、20針も縫われてしまった。時計を見ると病院に運ばれてから2時間近く経っていた。オオモリさんの白いコ罗纳でコートに戻ってみると支配人のカドワキさんがボクの耳を貫いたその突起物に黄色いテニスボールを黙々と取りつけていた。ボクを見ると申し訳なさ

そうな顔で「モリシタ君。ほら、ボールつけたから、もうぶつかっても大丈夫だよ」そう言った。

「何が大丈夫なんだよ。20針も縫ったんだぞ。耳にしては大ケガなんだ。ヨシムラ先生もそう言っていたんだぞ。耳にしては……」言いかけて、カドワキさんを見ると、カドワキさんはもうすっかり陽の落ちたテニスコートで一人、残り少なくなつた黄色いボールをかたづけていた。「もう少し早くボールつけてたらモリシタ君もケガしなくて済んだのに」よく聞こえなかったが、そう言ったようだった。紺色の空には星が輝いていた。

ボクは耳を20針も縫ったけれど、チンペイさんは体を壊してしまった。仕事のあい間をぬって連日、品川プリンス・ホテルのインドアコートで特訓していたらしい。腕の方は上達したけれど内臓を壊してしまった。ジローさん・モンタ・イリヤ・マサトシさん・ヨシタカさん、テニスした人は、みんなこの話を知っていた。中学からテニスを始めたキャリア組とちがって、20代後半からラケット握ったボク達ノン・キャリア組は、そうでもないしと彼らには追いつけないことを知っているからだ。

まじめに取りくんでいる事もあって、ボクのテ



音楽業界ではテニスの先駆者である筆者（左より3人目）

ニスは音楽業界では少しは知れわたっている。
「神戸で仕事があるからそのあとテニスしよう」

そんな電話がかかってくる。この前CBSソニーのセキハラ君が電話をくれた。

「タケシさんがテニスしたいって言ってるんだけど、モリシタさん、相手してくれない？ 水曜日なんだけど」

「ああ、いいよ」

「それじゃ、2時にコートで」

ボクはモンタを誘って江坂テニスセンターへ出かけていった。そこにはマツザキさん・セキハラ

君・ミズカミ君・フジムラ・ツユリさん、それにタケシさんが集まっていた。タケシさんは噂どおりサウスポールの本格派で、バンドがまだ売れない頃小さいオープン大会によくエントリしていたように「ベスト4が最高かな」そう言っていた。タケシさんとは前からシングルの約束をしていたけれど、その日は人が多すぎて結局出来ずじまいであった。フジムラもツユリさんもみんな真剣だった。時間がきたのだから、セキハラ君がよく通る声で、

「じゃソロソロ、ケーサ・ミーノ行きましようか」そう言った。フジムラとツユリさんを乗せたボクの車は、もうあたり前になった渋滞の新御堂を走り40分かって大阪の料亭に着いた。先に出発したタケシさん達はすでに着いていて、ビールをのどをうるおしたところだった。セキハラ君は軽くセキバライをすると、

「お疲れさんでした。ひとまず乾杯」

と音頭をとった。ビールがウイスキーにかわってもピッチはおちることなく、どんどん胃袋に吸収されていた。

＊ ＊ ＊

△つづく▽

オオモリ（音屋で理容店を経営している。テニスのため毎日走っている47歳カドウキ（音屋のテニスコートの支配人・見かけ以上に男っぽい49歳）ヨシムラ（音屋市民病院の耳鼻科のドクター）チンペイ（谷村新司・最近一段と薄くなっている）ジロー（杉田二郎・ライオン丸、テニス、スキーに凝っている）イリヤ（元ジョーシフルーツのリーダー）モンタ（岡田頼命・「好きやネン」のCDがヒットした。子供の名前は「小麦」）マサトシ（あの中村雅俊さん）ヨシタカ（南佳孝・ロマンチスト、モンローウ・オークの作曲者）セキハラ（CBSソニープロモーター）タケシ（スクエアのリーダー伊藤たけし・最近「スポーツ」というタイトルをLPでリリースした）マツザキ（関西芸能テニス界のドン、タレントの知人も多く、過去関西社会人ダブルス優勝）フジムラ（ラジオ局のイベント担当。男子中・高卒で女性に対してイビツ）ツユリ（ラジオ局ディレクター）クリスチャン（最近デの手術をした）ミズカミ（CBSソニープロモーター）ボク（モリシタヨシノブ38歳）注：ケーサ・ミーノ→サケ、ノモ

イキイキとイタリアン・デザインを
着こなす。

- 大胆な色とデザインの陽気なイタリアン・ファッションに汚れやくたびれた感じは禁物です。
- クッキリと鮮やかな色彩感覚。
- 伸びやかにシャキッとした仕上げ感。
- 着用前、着用後には、いやなシワやシミのチェックをお忘れなく。

美しさには理由があります。
わけ



原色が美しいイタリアン・カラーのファッションポイントは白。白をイキイキと美しくリフレッシュすることで全体の鮮度がよみが返ります。



Since 1933

ニシジマ

本社／神戸市灘区記田町1丁目2-16
078-851-2440

- 大阪本社/06-853-1332 ■つかしん店/06-420-3754 ■ロープ・ニシジマ/078-332-2440
- 山手店/078-221-2440 ■宝塚店/0797-72-0810 ■リフォーム・フルフル/078-221-9110

5つの顔をもつサブレ

エトランゼ



ビーフチーズ・チョコ

アーモンド・パイハース・トロピカル

新しい味もお楽しみ下さい。

¥800 ¥1,000 ¥1,500 ¥2,000

北欧の銘菓

2-人イム・コンフェクト

■本社・工場・熊内店 神戸市中央区熊内町1-8 TEL 221-1164

私の好きな都市“松山”

—文学・温泉・城下町—

嶋田 勝次 △神戸大学建築学科助教授▽

人はそれぞれ自分の好きな街や思い入れの都市をもっているのではなからうか。私にとっては生まれ育った神戸は別として、「坊ちゃん」の町松山に親しみをもちつけている。

それは個人的によく訪ねたというだけではない。都市環境として興味あるものがいっぱいころがっているからである。歴史がある、文化がある。何か部分をとても全体を見ても、風格とか深味が形造られてまとまりがあると思えるのである。



道後温泉本館

“春や昔十五万石の城下哉”

正岡子規の何十年前の俳句か知らないが、現在の松山のふんいきまでしっかりと表現してくれている。やわらかな陽光の中にでんとある城山を中心につくられている松山の街が、ずっと豊かに思っている。

新建築誌の最新号（61年4月）

に「松山城本丸復興—伝統的な木造築城技術への挑戦—」という紹介記事が見える。戦災をまぬがれた本丸の天守閣のまわりの建物が戦後不審火で焼失したが、二十年来の復興の結果、この三月三日異機等の完成によって終了したとのことである。

戦後各都市での鉄筋コンクリートの形ばかりの城郭復興が多い中で、古い木造技術を踏襲した復元はなかなかむづかしいところだが、高知の上田虎介先生の長年の努力が実ったことが特筆されている。

先生は私共の神戸大学建築学科の御出身で大先輩にも当るし、私と建築史の多淵先生が助手時代二人だけの「規矩術」の集中講義を受けたことが思い出される。

松山城は市内の中央の小高い山上に建ち、どこからでも眺望出

来、都市のみごとなシンボルとなり、その麓を路面電車が城南線と城北線として走り、駅と道後温泉を結んでいる。明快な交通網には外部の人にも分りやすい都市構造となっているのもよい。

道後温泉は市民の公衆浴場であると共に生きた観光資源である。木造三階建の本館は、神の湯・霊の湯など200円・600円・950円・1200円など何段階もあって、庶民的ふんいきやおおらかな気分まで味わてくれる情緒がある。

近くには石手寺への散策から、伊佐爾波神社・子規記念博物館、そして最近完成の丹下健三による愛媛県民文化会館などまで、徒歩圏内に見せ場があふれている。足を伸ばせば砥部焼をのぞくのも楽しいし、いくつもの味覚のみやげものもい。果物や海の幸も新鮮だし、タルトや母恵夢という名の銘菓も面白い。

ここで何も松山の観光PRをしたかったのではない。都市のよさは規模や機能にあるのではなく、いっばいの変化ある中味でないかと言いたかったのである。

この正月に訪ねた時でも、文学的風土が迫って来たただけではなく、大街道から銀天街まで若者があふれかえって、有形無形の都市の資源がずつつながっているよさを実感して、やはり松山を私の都市ベストテンの上位に位置付けたいと、あらたな思いをもったのである。

市民のボランティア活動が 都市の文化を盛りあげる

陳 舜 臣(作家)
広中 和歌子(評論家)

――数学者・広中平祐先生の奥さま、和歌子先生は、二十年の滞米生活で養われた豊かな国際感覚をもとに、現在、教育や文化などの分野で幅広い評論活動が続けておられます。「ジャパン・アズ・ナンバー・ワン」などの翻訳もあります。今日は、同じく国際感覚の豊かな作家の陳舜臣先生と対談をお願いいたしました。

“顔” がない日本人

広中 私は二十歳代でアメリカへ渡り、長らくアメリカに住んでいたのですが、アメリカから見ますと、日本も中国も東洋という共通項でくくられて考えられるという傾向の中に自分を置くような感じがあったんです。当然、日本と中国は違いますよ。

ね。

陳 似たところも多いですね。だから余計に違ったところに気をつけないといけない。しかし、中国の中でも南と北、東と西とは違いますよ。

陳 舜臣さん

この間、中国文学者の駒田信二さんにお聞きしたんですが、あの人、戦争中に軍から落伍して中国語が出来るものだから、一人で中国をふらふらしていたらしいんです。そうしたら中国人がかくまってあげるといいます。相



広中和歌子さん

広中 アメリカをはじめ世界各国で中国人街が出来ますね。ところが日本人はグループで固まるといわれますが、結構アメリカ人の中に散って行ってしまう。中国人の場合はお互いに扶け合って暮らしていますね。やはり家族制度の違いでしょうか。

陳 ファミリーのなんですね、中国人の方が。

広中 それも血縁の者だけでなく、例えば中国残留孤児に見られるように、血が通わなくても自分の一族として遇

手は農民で人手が欲しかったんですね。話をしていると、自分のことを中国人と思っているらしい。オレは日本人だと言っても分かってもらえない。日本は山東半島辺りにあると思っているらしい(笑)。外国だとは思っていない。困ったと言っていました(笑)。教育を受けた人は別として、今から半世紀ほど前は、一般の農民などは日本は中国の一部だと思っていたんでしょうね。

日本人は本来、いろんな地域からの民族が混ざり合っているのです。バラエティがあつていいのに、国土が狭いということもあるのでしょうか、同一民族とされている。たかさんの要素をかかえていたのに、それを一つにしないといけないという大きな意思が働いていたのではない。だから顔を見ても「日本人の顔」というものがない。これが日本人だというモデルがないんです。

広中 一九六〇年にニューヨークのエキスポへ行つたときに韓国館に入りましたら、あなたは韓国人だと言われました。ところが二年前に初めて中国へ行ったら、あなたの顔はそっくり中国人ですねって言われたんです(笑)。見方によって変わるんですね。

陳 モンターージュして行くと韓国人らしい顔はある程度出来上がるんですが、日本人の標準的な顔はつくりにくいんですね。日本人の起源については、柳田国男の南島説、江上波夫さんの騎馬民族説などがあつて、方々から来てバラエティに富んでいたんですよ。ところが統一国家をつくる上でそれが邪魔になったんです。だからかなり人工的に同一民族というものがつくられたんでしょうね。

広中 中国の場合、華僑が国際的に活躍していますが、華僑は自然発生的に海外へ出て行つた人たちなのですか。

陳 華僑にも時代によって変遷があるんです。近世は商業活動が主ですが、古くは農耕というか開拓をやっていたんです。

広中 ベトナムとかへ行つたんですか。

陳 そうです。マレーシアの錫鉱、ゴム園などですね。アメリカ合衆国の大陸横断鉄道の建設にも広東からたくさん行っています。耐久力があるので黒人よりも中国人の方が向いていらしいですね。商業活動で成功した人が自分の出身地から現地へ人を呼んだりするわけです。

するような懐の深さがあるんですね。

陳 昔は働き手が欲しいということもあったのでしょうね。それから中国では祖先の祭事を大切にします。だから子供がいなくて困るわけですよ。いない場合には養子をとって、祭祀をしてもらう。生まれたら子孫を残すというのが一つの大義なわけです。大義のためには嗣子を大切にします。これは血がつながっていないでもいいわけです。

広中 なるほど。ところで陳さんのお生まれは……。

陳 神戸です。神戸は昔から中国人が多くて、私の卒業した神戸小学校のクラスにも何人かいましたね。当時、華僑の学校もたくさんあって、広東語や北京語で教えていました。昭和十年代に中華学校と同文学校と華僑学校とが合併しまして現在の中華同文学校になり、北京語で教えるようになりました。ですからわれわれの年代では当時、中国人でも北京語の出来ない人が随分いました。

広中 お家では何語だったんですか。

陳 福建語ですね。

広中 でも日本語をしゃべっていらつしやると、まるで日本人ですね。

陳 そうですね。ところが司馬遼太郎によると中国人は日本人とは歩き方が違う。歩くとき足の裏を見せると言うんですよ(笑)。これはね、布草鞋^{フカシ}というベタ靴を履いているからそう見えると思うんですよ。彼は中国人は足の裏を見せながら歩くと言うんですがね(笑)。

逆に言う中国残留孤児、これはもう中国人ですね。

広中 日本人には見えませんね。どうしてでしょう。

陳 やはり氏より育ちですよ。

広中 最近では違って来ていますが、日本人はタタミの生活ですが、中国では椅子の生活ですね。

陳 だから靴を履いたまま家に入ります。寝室は違いますが、中国では椅子の生活ですね。

広中 日本の家は外国人から見ると寝室のようなものだと思いますね。靴を脱ぎますからね。ヨーロッパあたり

では靴を脱いでお客さまにお目にかかるのは失礼ということになっておりますね。日本人が家に人をあまり呼ばないのは家は靴を脱いでくつろぐ場だからという説もあります。

陳 靴を脱ぐというのは、一つの「壁」でしょうね。

でもね、アメリカへ行くときよく思うのですけれど、同じ大陸なので中国とアメリカはよく似ていますね。例えば物を買って包装してくれるときも、アメリカは中国式ですね(笑)。お婆ちゃんが紐でゆっくりとくくってくれてね。日本人はすぐにイライラするでしょう。それがないですね。

広中 アメリカから日本へ帰って来て異和感を感じた一つは、店へ買物に入ったとき、アメリカなら自分より先に来た人が注文するまで、かりに並んでいなくても待っているわけです。ところが日本では、そういうふうに私が待っていますと、私の後から来た人が先に声を掛けてしまふ。だから早い者勝ちという感じですね。また店の人も同時に何人かの客を捌けるんですね。アメリカなら同時に二人の人が声を掛けたら「ジャスト・ア・モーメント」って待たせますよね。そういう点、日本とは違えますね。

「よそ者」を積極的に受け入れた神戸

陳 都市生活ということになりますと、日本は城壁を持たない暮らしてしよう。中国では都市と言ったらそれは城のことです。こういう点からも違いが出て来るのでしょうかね。

広中 スペインとかフランスにもかつてあったように城の中に住むわけですね。

陳 そうです。町全体を城壁で囲むのが原則なんです。

大昔は農民だって農耕仕事が終わったら城の中へ帰って行ったんですよ。人間は城壁の中に住むのが原則で、それは野獣を防ぐこともあるのですが、何しろ大陸なのでどういった異民族に襲われるかも分からないという心配

があったんですね。その点、日本は周囲が海ですからそういう心配はなかったんですよ。日本の城は、お殿様が住んでいただけですね。城下町はあっても城壁はないんです。

広中 だからヨーロッパでも住民全部を巻き込んだ戦争になるんですね。

陳 ええ、中国でもそうです。

広中 今になってみると、ヨーロッパの旅の楽しさというの、城壁の中に残された古い町並みを見ることがですね。都市としても大変に美しいと思うんです。

陳 日本では、だから攻城戦というのは経験していませんですね。城の水攻めということはあっても、あれは兵隊が守っている城で住民のいる城ではないですね。住民ごと一年も二年も敵の攻撃に耐えて生活をするというのはヨーロッパや中国にはあっても、日本にはないですね。

また町の城壁を破っても、今度は大将のいる城を落とさないといけないわけです。城の中に城がある。その城は象牙の竿に旗を立てている。だから牙城というんです。それを落とさないと町を占領したことにはならない。

かつての中国は都市国家ですね。日本とは町の成り立ちが違うと思います。

広中 日本は統一ということでは早くからなされていたんですね。

陳 ええ、単一民族と見せかけてですね。大体七世紀頃ですね。その頃につくられた「古事記」は、いかに日本がつくられ、われわれは一つであるかを教えていますね。その必要があったということでしょう。

広中 明治になるとたんに様相が変わってくるわけなんです。神戸は明治以降の町で、それまでは漁村だったんですね。

陳 古くから兵庫の港がありまして、人口は一万か二万ですよ。ところが明治の開港のとき、兵庫の人は反対したんですね。

広中 どうしてですか。

陳 西洋人が入って来たらかなわんということでしょうね(笑)。それで神戸港が開港したわけですね。

広中 私は東京生まれの東京育ちなんです。横浜の外人居地がわれわれにとって非常にエキゾチックに感じるの、お墓が丘の上にあつたからなんです。で、こういうふうの説明されていたんです。望郷の念をもつ異人さんたちが埋められてからも故郷を眺められるように、ということなんです。だから外人の住まいイコル丘の上というイメージがあるわけなんです。

それでアメリカへ行って感じたんですが、外国人にとっては平地よりもより高い所がより価値があるということを見ました。高い所に住むほど収入がいい。景色が大きな付加価値になっているのに、日本ではそういうことがない。ところが神戸とか横浜では、それが明治初年からあつたのではないかと思うんです。

陳 神戸でも明治以来、外国人は山手の方に住んでいましたね。六甲山を開いたのもイギリス人です。

広中 神戸は明治から外国人も多いのですが、住みやすいからなんです。

陳 住みやす過ぎていけないんですね(笑)。周りを気にせずに住めますね。

広中 ということは他所者が多いということですか。

陳 そうです。明治初めには一万か二万だった町が、明治十年に十万になるんです。十年で十倍ですから大部分が他所者ですよ。だから気楽なんです。私の娘が京都へ嫁いだんですが、これが京都となると大変のようです。月に一回か二回、家の前の溝を掃除するんです。ところが新婚家庭だから溝掃除の道具がない。それで向かいの人に借り、神戸のようにお礼だけ言って返したところ主人に怒られた。そういうときには小さくてもいいから菓子折りの一つでも持って行くものだということなんです。神戸の場合、そういう気兼ねがないですね。

広中 東京もそういうところがあつて、神戸とか横浜には親しみがもて、住みやすいだろうなって気がするんです。



す。私はアメリカから戻って来て京都に住んでいるのですが、これは私にとって一つのチャレンジじゃないかと思っているんです。

つまり、この京都でやって行けたら、全国どこでもやってゆけるというような(笑)、そういう感じがするんです。京都ではいきなりすぐに親しくしてもらおうという期待で付き合おうと、とたんに肘鉄を喰らわされそうになります。距離をおいていると向こうが安心して声をかけてくれるという、そういう感じがして来ているんですけどね。

神戸は外国人が多いですから、外国人アレルギーというのは少ないのでしょうか。

陳 彼の町よりも少ないでしょうね。

広中 私の娘は京都の学校に入れたんです。で、電車やバスに乗るときに幾らか分からないのでもたもたしていると、非常に邪険にされるわけです。阿呆かいなって調子で。娘の場合は日本人ですが遇々日本語が上手じゃなくて、日本の習慣も知らないからなんです。これがアジアの人だったら、日本はすくく住みにくいと思うに違いないと思うんです。金髪で青い眼でもしておれば外人と認めて辛抱強く応待してくれるかも知れないけれど、ただどいわゆるアジア系の人に対して日本人は不親切なところがあるのじゃないでしょうか。

陳 ありますね。それはいけないことですよ。

広中 息子の方は同じ時期に神戸のカネディアンアカデミーの寮に入れたんです。週末ごとに帰って来るはずなんです。帰って来たことがない(笑)。中学一年のときですよ。よっぽど楽しかったんでしょうね。

陳 カネディアンアカデミーには日本人もかなり通学していますね。韓国の人もいますし。

神戸にも昔はトルコ小学校というのが回教寺院の中にありましたね。昭和十年頃に来て、全校生が二十人ぐらいでした。白系ロシア人の中にトルコ系が随分といまして、その人たちがかなり神戸に住みついたんですね。

なぜボストンはよみがえったか

広中 ボストンと京都とは姉妹都市なんです。姉妹都市になるだけの共通点があります。歴史的には京都の方がうんと古いんだけど、ボストンはアメリカの都市としては古く、大学があるし、様々な商業の中心でもあるわけです。そしてかなり画期的な新しいことをやる土壤もあります。

私がアメリカへ行った頃のボストンは、かなり地盤沈下していました。産業の中心であった皮革産業や繊維産業が落ち目になり、またかつては貿易港だったのに港も駄目になっていました。人口もどんどん郊外へ移ってい

ました。郊外にはハイテク産業があったからなんです。ですから総合的に見ると、産業がなかったわけではなくて、新しい産業が興りつつあったんですが、中心部はドーナツ化現象を起こしていたんです。

ところが一九七六年の独立二百年祭を契機に町そのものがよみがえりました。どういう形でよみがえったかと言うと、当時のムードとしては「スモールイズビューティフル」という時代だったので、エキスポなど大きなことには反対。住民参加の何かをやろうということなんです。たとえばアメリカの家は、レンガ造りですから外見だけはいいわけですが、内部が荒れ果ててしまっているような古い建物を非常に安く売ってしまうわけです。それも、内部改造をして本人が住むという条件をつけてですね。そうすると、たとえば建築家の卵のような人が買ったりして、それが何軒か続くと、それまでのスラム街がよい場所になる。また自分たちの家の前に花を植えるとか、そういうことで少しずつでも住民が努力をして行けば、町に段々と魅力的な所が増えて来ます。そのように中産階級の人たちが住み始めますと、ホテルやショッピング・センターなども建ち始める。ホテル内にコンベンション施設が出来始めると、国際会議なども誘致でき、そのためには文化をもっている町の方が好ましいということ、相乗効果でさらにすごいホテルや銀行も出

来ました。つまりサービス産業部門を中心に町がよみがえったわけです。

このように、いったん稠落した町でも、やり方によってはよみがえるということですね。

陳 町を魅力的にすればいいわけですね。

広中 そうなんです。それをどういう形にするかが問題なんです。たとえば京都の場合、建都千百年というチャンスがありますね。ボストンの素晴らしいところは、古いものをそのまま残しつつ、近代的なものと共存させていることです。港の倉庫でも形はそのままにして内部だけを改造するわけです。芸術家のアトリエになったり子供博物館になったり、面白い再開発が始まっているんです。周りの歴史的な建物と調和を保った形で五十階建のマンションなども建ったりしています。

私も住んでいたボストンの家は百年以上経っているんです。しかし土台は非常にしっかりしていますので、百年前、二百年前の家でも結構使われているんですね。京都でも明治以降に出来た石造りやレンガ造りの建物が残っていますが、そういうのを潰して安っぽいものに建てかえたりしますね。

ボストンには木造でも結構古い家が残っているんです。最初はそれを全部壊して建てかえていたのが流行らなくなりました。広い敷地に建っている場合など、その家を



前に移動させ、後に建て増す。今まで二家族用だったのが八家族が住めたりという、いわゆるマンション形式になるわけです。しかし表側から見ると古い建物の雰囲気があるまま残っています。木造のよさは建て増しが可能だということですね。だから日本でもやたらに壊さないで、もうちょっと肌目細かくやって欲しいですね。

また、ボストンではボランティア活動がとても盛んですね。今、州知事の奥さんが中心になって美化運動をやっています。それぞれが自分たちの街並をいかによくするかというプランを立て、そのコーディネイトを州知事夫人がやっているんです。

陳 日本ではボランティア活動は低調ですね。でしやばっていると思われませんか。

「でしやばる」ことはいいことだ

広中 アメリカのある歴史学者の講演に感激したことがあるんです。アメリカにおける女性のボランティア活動をいろいろと調べられた方なんです。アメリカの場合でも女性はそれまで日本と同様、居場所が家庭であるというところで表舞台では活動していなかったんですが、様々な形でボランティア活動をやることによって、たとえばこの町にこういう施策が必要だという場合に、政治的な動きをして地元の代議士を動かしてという形になり、ボランティアというアウトサイダーによってアメリカは動かされて来たと言うわけです。ところが現在は女性の社会進出が盛んで、つまりアウトサイダーがインサイダーになってしまつて、逆にボランティアでなくなつてしまつた、しかもアウトサイダーであつたために利権がからまずに正論のはけた人たちが、組織とか権力の中に組み込まれれば、言いたいことも言えなくなるのではなからうかという内容の話で、私は感心したんです。

陳 日本人は潔癖すぎるのかも分りませんね。

広中 いい恰好しいだと思われるのを嫌がるというか、人さまのために何かしようといったことをストレートに

言うことは恰好悪いと思われているんじゃないか。

陳 こいつは目立ちたがっているなということば僕らの子供のときからありました。これは日本的な情緒で、いつの時代にもあつたと思いますよ。

広中 私、一九五八年にアメリカのマサチューセッツ州へ行きましたが、州のセネターがジョン・F・ケネディだったんですね。二年後に大統領になったときに彼は演説したんです。「国が自分たちのために何をしてくれるかではなくて、自分たちが国のために何が出来たかを考えよう」と。これはギリシアの哲学者キクロが言つた言葉らしいのですが、そういうことでアメリカではボランティア精神が高揚されたんです。私の中には、そのときのケネディの言葉が焼きついていっているんですよ。

ところが日本に帰って来ますと、行政は何をしてくれるかということばかりが多いんですね。

陳 それは昔からですな。

広中 お上にしたがえということですね。

陳 裏返すとお上が何でもやってくれる、それを当然だと思つていらっしゃるんですね。

広中 でも神戸は昨年のユニバーシアード大会ではボランティア活動が成功しましたね。

陳 神戸の場合、やりやすい雰囲気がありますね。隣近所を意識しなくてもよかったという百年來の伝統がありますからね。

広中 ただボランティアといってもコーディネイトする力というか、ボランティア活動の知識なりノウハウなりが大切なんですな。アメリカでは、たとえば子育てが終つて再就職というときに、ボランティア活動での経験が生きて来るというか、有利になるんですね。ですからそういう実質的なメリットにおいても盛んになるのじゃないかと思うんです。

私、京都に住んでいますので、京都のことばかり考えていたんですが、京都、神戸、大阪と随分と性格が違っているんですね。



“でしゃばり”のすずめを話す広中さんと陳さん

陳 それが日帰りの範囲にあるというのが強いですね。
 広中 私は最初、京都もボストンのように大きなホテルが出来たらいいと思っていたんです。ところがアメリカ人にその話をすると、京都を変えちゃ困るというわけです。つまり外国から見ると文化的な意味で日本のセンターは京都なんです。むしろ神戸や大阪で会議をして、あとから京都へ行ったらいいじゃないかということなんです。しかし、それでは京都に充分にお金が落ちるかどうかということなんです。古い文化遺産を維持するだけでなく、活性化するにはお金がかかります。また、新しい人が集まらなければならぬ。

陳 これは京都だけの問題ではなく日本全体の問題として考えないといけないですね。

広中 そうですよ。ただ京都の場合、交響楽団、美術館

など皆、国立や市立ですね。そこにはボランティアの入り込む余地がないんです。ボストンには美術館、科学博物館、交響楽団など超一流のものがあるのですが、すべて私立なんです。基金も必要経費も寄附です。未だにボストン美術館にしても様々なボランティアに支えられているんです。たとえばフラワーコミッティというのがあって毎週何回か花で館内を飾るんです。京都には随分とお花の流派があるのに、美術館には花なんかありません。各流派がお花を生けたら素晴らしいと思うんですが。国営、市営になっちゃうと民間の入る余地がなくなってしまうんです。

ボストン美術館の場合、基金で十分にやってもさらに市民参加で盛り上げる。市民が参加すれば、さらに多くの人が見に来てくれます。見に来てくれることはいいことだという考えがある。だけど国営だとかなになると、見せてあげるといふ感じがなきにしてもあらずですね(笑)。

陳 ボランティアが花でももって行ったら、許可を得たか、なんて言われますよ(笑)。

広中 ボランティアが盛んになるためには、でしゃばりだといった考え方をなくすことです。やることはいいことだという考えをもつこと。また、ボランティア活動をすれば、それがあなたにプラスになりますよ、キャリアアチェンジの足掛りになりますよ、ということを知ってもらい、そういう活動がたとえば就職のときに評価されるということが大切ですね。誰かが少々何と言われてもやり始める。そうすると輪が広がって行くんです。そういう「でしゃばり」が出て来ないと日本はこれからよくならないのではないかと思います。

陳 それを世間の人が理解しないとダメですね。それと、そういうことのやりやすい雰囲気をつくることです。広中 悪口を言われても平気になる人が増えないと駄目ですね。神戸はすでにユニバーシアード大会で実績があるのですから、ボランティア運動を神戸から全国に広げて行っていただきたいですね。(ブランドウプランにて)